



TITLE:

<翻訳>訳者解説

AUTHOR(S):

中岡, 翔子

---

CITATION:

中岡, 翔子. <翻訳>訳者解説. 文芸表象論集 2014, 1: [1]-[2]

ISSUE DATE:

2014-03-31

URL:

[https://doi.org/10.14989/LAR\\_1\\_\(1\)](https://doi.org/10.14989/LAR_1_(1))

RIGHT:

## 訳者解説

中岡 翔子

作家グスタフ・マイリンク（本名マイヤー、一八六八・一九三二）は、おもに幻想的な長編小説『ゴーレム』（一九一五）で知られているが、創作の初期の段階では政治風刺的雑誌『ジンプリチシムス』に数多くの短編小説を寄稿していた。ここで訳出した『プレパラート』（一九〇三）、『蠟人形館』（一九〇七）もそのうちのひとつである。この二つの作品が収められている『ドイツ俗物の魔法の角笛』（一九一三）は、初期の風刺小説から中期以降の幻想的な長編小説への過渡期に、それまでの作品を集成した形で刊行された。その中でマイリンクは、当時ドイツでもはやされた近代科学や軍国主義、郷土芸術を風刺の対象として描き出している。この二作品では、とりわけ近代科学が解剖学者モハメド・ドラシェコーによって体现されている。そこで、ここでは解剖学者モハメド・ドラシェコーなる人物に焦点を当てて作品を紹介したい。

両作品に共通する解剖学者モハメド・ドラシェコーの名前は、おそらくインド・ムガル朝時代の皇子ダーラー・シュコーからとられている。マイリンクは『壇の上の男』（一九〇四）でもドラシェコーの名前を用いており、ここではドラシェコーは解剖学者ではなく嫉妬に狂った皇子の役である。史実における皇子ダーラー・シュコーは、一六一五年にムガル帝国皇帝シヤージヤハーンの嫡男として生まれ、親ヒンドゥー派のイスラム神秘主義者のもとで教育を受けた。それゆえ彼はイスラム教とインド哲学を融合させることに生涯をかけて尽力し、ウパニシャッドをサンスクリット語からペルシャ語に翻訳している。またダーラーの著作『両洋の合流』には、彼が求めた神の統一という思想が展開されている。それによると、神と究極の自己の本質とはともに無限の海として分かちがたく結ばれており、無限の海という観念のなかで諸宗教の差異が解消されるのである。とりわけダーラーがイスラム教とヒンドゥー教の統一的解釈を模索した目的は、異なる宗教間の武力衝突を回避すること

にあった。ダーラーのこうした哲学的、形而上学的な試みを鑑みるならば、解剖学者ダラシエコーの不気味な実験は単に科学の戯画というだけではないだろう。そもそもダラシエコーにとって解剖学者という肩書は、単に科学的である以上の意味を持っているのかもしれない。ダラシエコーの実験に魔術や錬金術といったいかがわしい要素がともなっている理由もおそらくそこにある。つまりダラシエコーの実験は、科学が迷信として排除しようとしたものを再び取り込もうとする試みなのではないだろうか。近代科学の生命に対する倫理的な問題が取り上げられている一方で、宗教的、歴史的な人物に焦点をあててこの作品を読み解くこともおもしろいのではないかと思われる。